

【展覧会評】

自然の賜物、銀の糸 「喜如嘉の芭蕉布物語」

大阪日本民芸館 2023年9月2日～12月19日

国際ファッション専門職大学 廣田 緑

大阪日本民芸館は、関西の財界有志企業と日本民藝館（東京、1936年開館）が1970年に出品した日本万国博覧会パヴィリオンが母体である。その後1972年、大阪日本民芸館として千里万博公園内文化ゾーンで開館した。ここでは国内外の陶磁器、染織品、木漆工品を収集し展示公開を行っている。年に二度ある特別展のうち、2023年の秋季は「喜如嘉の芭蕉布物語」展であった。本展では2000年に芭蕉布の作り手として重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された平良敏子と、敏子が設立した芭蕉布織物工房でつくられた芭蕉布、戦前の製作者不明の芭蕉布の他、その素材である糸芭蕉（花名イトバショウ、学名リュウキュウバショウ）を繊維に加

工したものが展示された（写真1～3）。

「民芸館（民藝館）」、「芭蕉布物語」展と聞いて浮かぶのは、民藝運動の主唱者、柳宗悦



写真1 大阪日本民芸館 第1展示室
(2023年11月15日廣田撮影)



写真2・3 平良敏子作の芭蕉布
(2023年11月15日廣田撮影)

が記した『芭蕉布物語』ではないだろうか。昭和 17(1942) 年、225 冊限定の私版本として出版された『芭蕉布物語』は、こんな前書から始まる。

今時こんな美しい布はめつたにないのです。いつ見てもこの布ばかりは本物です。その美しさの由来を訪ねると理の當然であつて、どうしても美しくならざるを得ない事情にあるのだとさへ云へるのです。実際こんな美しいものが、現在尙も作られてゐると云ふことは、奇蹟にも等しいことのやうに思はれます。[柳 1942: 1]

柳はまた、芭蕉布の糸について次のように記している。

太陽の光に当たると、まるで銀の糸で、もあるやうに光ります。こんな美しい糸が、どこに匿れてゐたのかと、いぶかしく思ふほどです。早くも自然の賜物の有難さを思はないわけにゆきません。清浄で、純潔で、美しく、さうして強靱なのです。[柳 1942: 7]

本展では、柳がこれほどまでに称賛した芭蕉布の紋様見本帳や、生産の 23 工程（第 1 表）、芭蕉布の着物と共に、戦後の沖縄県大宜味村喜如嘉で芭蕉布を復興させた平良敏子と民藝運動との関係を知ることのできる品々も展示された。『芭蕉布物語』直筆原稿の他、棟方志功¹⁾の《平芭蕉布匠織女韻図》、バーナード・リーチ²⁾の《鳥之図》、芹沢銈介³⁾の《文字入り四季文 夏》などを見ることもでき、芭蕉布そのものの鑑賞というよりは、敏子の人生と芭蕉布に魅せられた人々との交流を体験するような、まさに「芭蕉布の物語」を見る展示だった。

展示会の特別協力に名を連ねる喜如嘉の芭蕉布保存会、喜如嘉芭蕉布事業協同組合、芭

蕉布織物工房は、すべて平良敏子と深い関わりのある組織で、喜如嘉の芭蕉布物語を現代に繋げてきた継承者である。また芭蕉布の復興に尽力した敏子を支えた重要な人物、倉敷の大原総一郎、彼女に織りの技術を指導した外村吉之介についての解説もあり、長く深い芭蕉布の物語を歴史として学ぶ機会にもなった。

以下で展示会場の構成に沿い、喜如嘉の芭蕉布、平良敏子と民藝運動、そして芭蕉布の過去と現在についてみていく。

1 喜如嘉の芭蕉布

沖縄では多くの織物がつくられている。芭蕉布、琉球緋、首里織、久米島紬、宮古上布、八重山上布、八重山ミンサー、与那国織など、それぞれに技法や模様、色づかいに独自性をもち、生活に密着したものが今日まで継承されている。数多くある沖縄の織物の中で、最古のもの 1 つだといわれるのが芭蕉布である [天空企画編 2002: 60]。

芭蕉布は、沖縄本島北部に位置する大宜味村の喜如嘉を中心に生産されている織物のことである。亜熱帯を中心に分布するバナナ(実芭蕉)の仲間である糸芭蕉の天然繊維を用いるため、その栽培から生地の仕上げまでの全工程を地元で、手作業で行うという日本でも希少な工芸品といわれる。糸芭蕉は一度植えると地下茎で増え、数十年は植え替えの必要がない。しかし、はじめの 3~4 年は繊維が粗いため、上質の糸にはならない。喜如嘉では鶏糞などの肥料を施し、成長過程で葉を落として根と先端の太さを一定にするなど丁寧に見守っている [喜如嘉の芭蕉布保存会 n.d. : 7]。植えてから 3 年でようやく良質な繊維がとれるようになり、芭蕉布一反をつくるには糸芭蕉の木が 200 本以上必要である。

畑仕事から始まる芭蕉布づくりには 23 もの工程があり(表 1 参照)、すべてが一貫作業で行われる。デリケートな糸の特性上、機

械で織ることができず、生産量はどうしてもわずかである。現在では着物、帯、紅型、ハンドバッグなどに仕立てて商品化されているが、つねに供給不足が続いている。生産量の増加と技術の継承が大きな課題となっている[天空企画編 2002: 66-67]。

芭蕉布の歴史は古く、13 世期頃から織られており、16 世期頃には現在の技法が確立されたといわれる。琉球王朝時代には王族の衣装であった他、中国（清王朝）や日本（徳川家）への最高級の献上品としての役割を果たした。政治的・経済的にも重要な芭蕉布は、特権階級だけのものではなく、貴族階級、士族、一般庶民まで、男女の差もなく、高温高湿な気候でも快適に過ごせる着物として重宝された[天空企画編 2002: 64-65]。

明治 26（1893）年の記録には、大宜味間切の産品として、木綿飛白（かすり）と並んで「芭蕉布が紺地 561 反、白地 249 反」とあるが、当時はほとんどが自家用で、村外に出荷されることはなかった。明治 38（1905）年に高機⁴⁾が導入され技術革新が進むと、明治 40（1907）年には根路銘（ねろめ）で芭蕉布品評会が開催され、副業として芭蕉布の生産が推奨された。こうした背景には、喜如嘉が従来船大工の多い地域で、労働力が那覇へ流れるという事情がある。村に残った女性の仕事として芭蕉布が見直されたのである。糸芭蕉の生命力が強く、耕地の少ない大宜味村に適していた[喜如嘉の芭蕉布保存会 n.d.: 2] ことも理由のひとつである。

昭和に入ると喜如嘉の芭蕉布は品質・生産量ともに向上し、村の品評会でも他の地区の品と分けて審査されるほどになった。しかし製品は仲買人によって買い叩かれ、女性の暮らしは苦しいままだった。それを打開したのが当時の喜如嘉区長、平良真次だった。昭和 14（1939）年、平良真次は東京三越で開かれた特産品即売会に芭蕉布を 300 反出品し、生産者に利益を還元すべく販路の拡大に尽力した。翌年には彼が代表となり大宜味村芭蕉

布織物組合が結成され、県の補助を受け喜如嘉、饒波（ぬうは）、謝名城（じゃなぐすく）に芭蕉布工場が設立された。こうして芭蕉布は新技法の研究や新製品試作など活発な動きを見せて発展していくのである（大宜味村サイトより）。

昭和 17（1942）年、柳が『芭蕉布物語』を執筆した頃の喜如嘉の芭蕉布は、戦中・戦後をとおしてもっとも活気を帯びていたことがうかがえる。

近時は大宜味村喜如嘉が最も仕事に多忙です。一村挙げて芭蕉布を織る盛況で、村に入れば績む者、括る者、染める者、枠巻する者、綜る者、織る者を、殆ど戸毎に見られるでせう。“やんばるばしやあ”（山原芭蕉）と云って庶民には名が親しまれてみます。[柳 1942: 5-6]

しかし、昭和 16（1941）年の太平洋戦争開戦にともない、芭蕉布工場での新たな試みはすべて中断される。かつては奄美大島から与那国島まで、琉球文化圏すべてで生産、着用されていた芭蕉布は木綿布に取って代わられ、第二次世界大戦では多くの織り手を失い、更に洋服への移行が加わり衰退していった。

2 平良敏子と民藝運動

太平洋戦争によって喜如嘉では男達が戦地へ出向き、芭蕉布の生産は減少した。昭和 19（1944）年、平良敏子が 24 歳のとき、知人から挺身隊⁵⁾に参加を勧められ、輸送船で倉敷へ渡り倉敷紡績工場、倉敷万寿航空機製作所に配属された。

倉敷紡績（現倉敷紡績株式会社）の当時の社長・大原総一郎⁶⁾は、柳宗悦の民藝運動に熱心に参加していた人物だ[新井 2022: 41]。父は日本初の西洋美術中心の私立美術館、大原美術館を昭和 5（1930）年に建てた大原孫三郎である。美術に造詣の深かった

父に似たのか、総一郎は沖縄からの女子挺身隊 120 名の郷愁や勤労の疲れを和らげるために沖縄の歌や踊りを推奨した。終戦を迎え挺身隊が解散した後、平良敏子を含む 4 人の喜如嘉出身者は倉敷に残り、沖縄文化再興のため、織物の事業計画への参加を促された [栗田 2023: 21]。

昭和 21(1946)年、敏子は柳宗悦を介して、民藝運動と関わりの深い外村吉之介⁷⁾から平織りや組織織物の技術指導をうける機会も得ている。「織りは織る人の心がそのまま表れる。織りをする人の心構えが大切、ものを見る目を養え」という外村の言葉を、敏子は後に回想している [栗田 2023: 22]。

同年 10 月下旬、沖縄に戻ることを決めた敏子を含めた 4 名の喜如嘉出身者を倉敷駅まで送った大原と外村は、「沖縄に帰ったら、沖縄の織物を守り育てて欲しい」と伝えたという [新井 2022:40-41]。こうして戦災の痕が残る沖縄に戻った平良敏子は、マラリア蚊の発生源になるという理由で占領軍によって切り倒された糸芭蕉畑で、戦争未亡人らに生産を呼びかけ、ゼロから芭蕉布の再興を目指していく。

しかし当時芭蕉布は生業として成り立たず、苦しい時代が続いた。昭和 26 (1951) 年になると群島政府主催の産業振興共進会で作品が 1 等となり、3 年後の島生産愛用運動

週間でも優秀賞を受賞した。同年「沖展」⁸⁾に工芸部門が開設されると、敏子はここで出展を始め、喜如嘉の芭蕉布は質の高い工芸品として評価されるようになっていく。この頃、喜如嘉に隣接する饒波地区から材料を大量に仕入れ、喜如嘉の女性を織り手として雇い、新商品の開発も積極的に行った。当時の人気商品にはアメリカ人向けテーブルマットやテーブルセンター、クッション、本土向けの座布団、帯などがあった。とくにテーブルマットは、芭蕉糸と同じく喜如嘉の特産品であるい草を交互に織り込んだもので、最盛期には 100 反近く織られることもあった (大宜味村サイトより)。

本展では、敏子が倉敷で外村や仲間と習作として織った木綿地の緋布、戦後沖縄に戻って間もなく制作したテーブルセンターなどの小物と共に、戦中から現在まで、芭蕉布の復興の軌跡が、芭蕉布織物工房の作品と併せて紹介されている。敏子の芭蕉布復興に向けての努力は、表 2 を見てもわかるが、芭蕉布発展のために帯の意匠を思いついたのが、敏子の独自性である。ナミガター (写真 4)、トゥイグワー (写真 5) のように、従来の紋様だけに留まらず、芭蕉布工房オリジナルの緋模様を考案した。

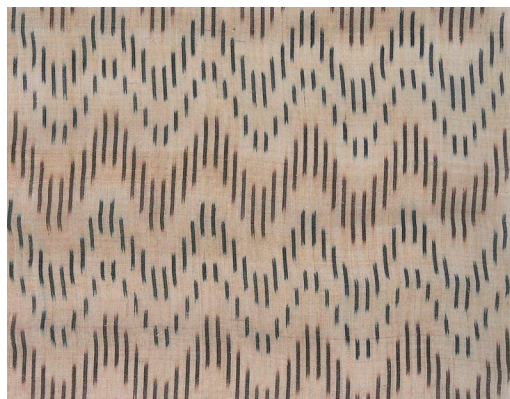


写真 4 芭蕉布着尺 (部分) ナミガター
 (『民藝』 848: 11)

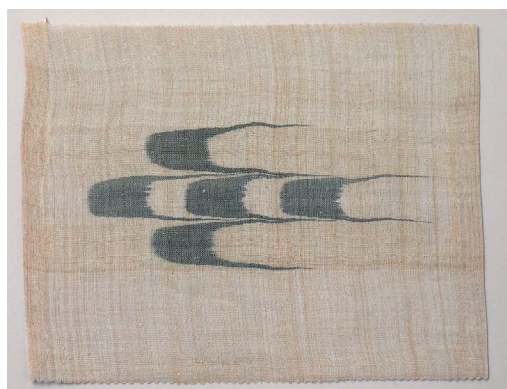


写真 5 芭蕉布着尺 (部分) トゥイグワー
 (『民藝』 848: 13)

3 芭蕉布の過去と現在

第2展示室では、戦前に沖縄県北部で織られ、日常の衣類として用いられた芭蕉布が展示されていた。名もない女性が自分自身や家族のために織ったものである。長く使用され、繕い、一部はパッチワークのように布を集め、柔らかくなるまで愛用された着物には、当時の作り手の、日常への優しく力強いまなざしを感じられる。日常に根付いた芭蕉布の中に、さりげない作者の遊び心がにじみ出たものもある。また時代の変化にともない洋服に仕立て直されたものもある。

これらの展示物には、柳の言葉がしっくりくる。

女達は只務めとしてのみ機を織ったのではありません。織ることが一つの喜びでした。誇りさへあつたのです。[柳 1942: 44]

柳は芭蕉布を織る女達を称賛しつつ、近代化の進む当時の日本にあって、機織工場の女工達が強いられた、労働に顔の青ざめるまで



写真6 平野敏子作 芭蕉布着尺
〔『民藝』 848: 1〕

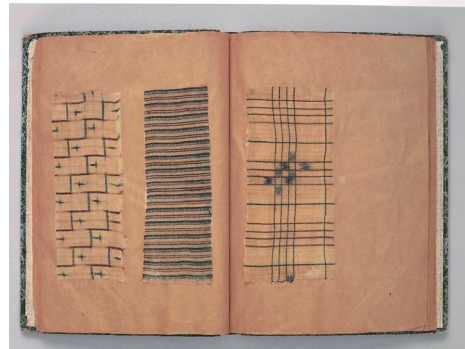
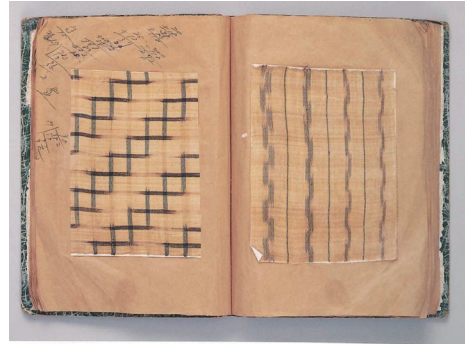


写真7 見本帳
〔『民藝』 848: 16-17〕

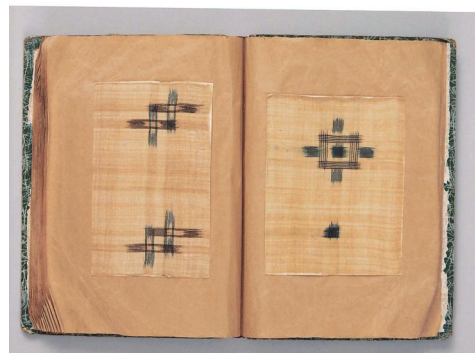
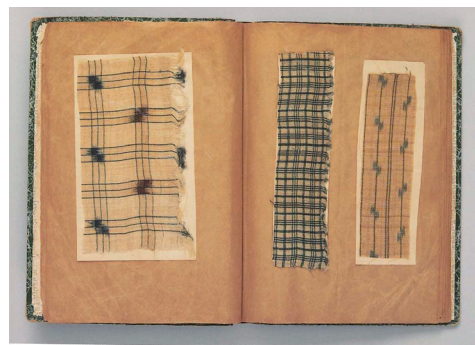


写真8 見本帳
〔『民藝』 848: 16-17〕

表1 芭蕉布生産の23工程

(〔喜如嘉の芭蕉布保存会編 n.d.〕をもとに筆者作成。写真は同書より)

工程	内容	写真	
糸芭蕉の栽培	原料となる糸芭蕉は植えて最初の3～4年は繊維が粗いため、上質の糸がとれるまで丁寧に育てられる。	 <p>芋炊きする敏子</p>	
芋剥ぎ(うーはぎ)	糸芭蕉の繊維のことを芋と呼ぶ。切り倒した芭蕉の皮を1枚ずつ剥ぎ、外側から繊維の強度や粗さによって4種類に分ける。もっとも外側から「うわーはー(上皮)」「なほうー(中芋)」「なはぐー(中子)」「きやぎ」と呼ばれ、芯にもっとも近い「きやぎ」は非常に柔らかい。		
芋炊き(うーだき)	4種に分けられた芋は灰汁を入れた大鍋で別々に数時間煮沸する。		
水洗い	灰汁を落とす。		
芋引き(うーびき)	繊維を取り出す。1枚の原皮を2～3枚に裂き、柔らかい繊維(緯糸用)と硬い繊維(経糸用)に分ける。		
芋干し(うーぼし)	分けた繊維を日陰で干す。		
チング巻き	乾いた芋をこぶし大の毬状に丸める。これを「チング」と呼ぶ。		
芋績み(うーつみ)	「チング」を30分ほど水で浸し、繊維をほどきながら固く結び、細い糸を作る。この作業が制作工程で最も時間を要する。		 <p>チングを巻く敏子</p>
管巻き	緯の地糸は撚らずに手巻きする。		
撚り掛け	経糸と緯糸は毛羽立ちを防いで丈夫にするため、霧吹きをかけながら寄りをかける。		
整経	撚り掛けした糸はすぐ「はし」という道具で整経する。こうすることにより、布のムラを防ぐ。		
煮認め(にーがし)	糸を灰汁で2～5分煮て柔らかくする。よく水洗いし軽く絞る。		
紺糸の組合せ	整経のたるみを片端に寄せ、柄の組み合わせをする。		
紺結び	染めない部分に芭蕉の皮を巻き付け、その上から紐で固く結ぶ。		
染色	喜如嘉では主に「てーち(車輪梅)」と「えー(琉球藍)」を用いる。		
紺解き	染めた布の結びを解く。		
糸繰り	糸を巻き取る。		
仮箆通し	整経した地糸に、縞用の糸を組み合わせ箆に通す。	 <p>綜統通し</p>	
巻き取り	箆に通した糸を結び、紺がねじれないよう棒の根元で結ぶ。		
綜統通し	巻き取られた糸から箆をはずし、糸を織機に通す。		
箆通し(おさ)	一対ずつの糸を箆に通す。		
織り	織りに要する日数はおよそ3～4週間。綿や絹より切れやすいため、織る作業よりも経糸の調子を整えることに時間を要する。		
洗濯	織り上がった反物を灰汁で煮立て、最後の仕上げを行う。		

表2 喜如嘉の芭蕉布と平良敏子年譜
 (巻末の参考文献をもとに筆者作成)

西暦	和暦	本稿に関わる人々と出来事
1905	明治 38	芭蕉布のための高機が導入され、技術革新・生産拡大の気運が高まる。
1907	明治 40	根路路で芭蕉布品評会が開かれ、芭蕉布生産が推奨され始める。
1921	大正 10	平良敏子、喜如嘉に生まれる
1926	大正 15	柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司らによって民藝運動が提唱される。
1934	昭和 9	大宜味村の芭蕉布生産量 220 反、うち自家用 1050 反、販売用 1058 反。
1936	昭和 11	柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎らと東京に日本民藝館を創設。
1939	昭和 14	柳宗悦、民藝運動同人らと沖縄で調査・蒐集を行う。
		東京三越開催の特産品即売会に喜如嘉の芭蕉布 300 反を出品。
1940	昭和 15	喜如嘉区長が代表となり、大宜味村芭蕉布織物組合結成。県の補助を受け 3 地域に芭蕉布工場設立 (太平洋戦争勃発とともに中断)。
1941	昭和 16	太平洋戦争が始まる。
1944	昭和 19	敏子、沖縄県挺身隊副隊長として倉敷紡績に入所。大原総一郎と出会う
1945	昭和 20	米軍が沖縄本島上陸。沖縄がアメリカ軍政下に置かれる。 7 月末、米軍の命令で共同作業の一環として芭蕉布生産が再開。 (職工総勢 69 名が各家庭にあった機を使用、布は作業場で分配した)。
		8 月 15 日終戦。
1946	昭和 21	敏子を含む喜如嘉出身者 4 名、倉敷で外村吉之介に師事。織りの基本、民藝の精神を学ぶ。
1947	昭和 22	沖縄県喜如嘉に帰り、芭蕉布制作を始める (21 年暮に帰郷という記述もある)。
1951	昭和 26	群島政府主催の産業復興共進会で敏子の芭蕉布が一等を受賞。
1954	昭和 29	島産品愛用運動週間で敏子の芭蕉布が優秀賞を受賞。
		「伸展」に工芸部門開設、敏子は作品を出品し始め、「喜如嘉の芭蕉布」が高い評価を受けられるようになる。
1955	昭和 30	この頃から芭蕉布の生産が県内でも喜如嘉近隣だけになる。
1963	昭和 38	芭蕉布織物工房設立。
1972	昭和 47	沖縄が日本に復帰。沖縄県の無形文化財に敏子が個人指定を受ける。
		日本民藝館展で最優秀賞 (日本民藝館賞) 受賞。 喜如嘉の芭蕉布が国の重要無形文化財に指定される。
1974	昭和 49	倉敷市アイビスクエアにて個展開催。
		各地で展覧会を開催するようになる。
1976	昭和 51	文化庁長官から表彰。
1978	昭和 53	喜如嘉の芭蕉布の品質格差をなくすため、規格統一した証紙使用を始める。
1980	昭和 55	黄綬勲章を受賞。
1981	昭和 56	ポーラ伝統文化振興財団から第 1 回伝統文化ポーラ大賞を受賞。
1984	昭和 59	通産省 (元経産省)「伝統的工芸品」指定を受けるために喜如嘉芭蕉布事業共同組合を設立。
1986	昭和 61	大宜味村立芭蕉布開館完成。後継者育成事業が始まる。
1989	平成元	初の海外展をアメリカ (ワシントン) で開催、以後ハワイ、フィリピンでワークショップを開催。
1994	平成 6	沖縄県より功労者表彰を受ける。
2000	平成 12	芭蕉布で国の重要無形文化財保持者 (人間国宝) に認定される。
2022	令和 4	逝去。

働く悲惨な状況と比べている。そして次のように続ける。「芭蕉布の裏にも汗は流れてゐるのです。ですけれどもそこには自由な仕事への餘地があるのです」[柳 1942: 44]。

戦後の芭蕉布復興という大きな責任を抱えた平良敏子にとって、その仕事すべてが自由であったのか、筆者には知るよしもない。しかし展示された芭蕉布の、とくに敏子が考案した緋紋様などを見ていると、彼女の微笑む顔が透けて見えるような気がするのである。喜如嘉の芭蕉布保存会発行の冊子「芭蕉布とわたし」の中には、敏子の想いが記されている。

芭蕉布は、その材料すべてが沖縄の自然にあるものからつくり出されます。機械も一切使いません。これは私の母や祖母、そのまた祖先たちが何百年も前から守り伝えてきた、大切な郷土の技術であり文化なのです。今、私たちがやめてしまったら、沖縄から芭蕉布はなくなってしまいます。それはあまりにも申し訳ないという気持ちで、私たちは今日まで様々な苦勞を乗り越えてきました [喜如嘉の芭蕉布保存会 n.d.: 22]。

柳は『芭蕉布物語』の中で、「芭蕉布の如きものが假りに或個人から生れたとするなら、一世の名手と云はれるに違ひありません。ですが沖縄では大勢の女達が作るのです。(中略)ですから一々名を出す必要はないのです。かう云う事情をこそ祝福すべきではないでせうか。(中略)私達は誰が作つたか分からない芭蕉布の美しさのその背後に、何か拝みたいものゝあるのを感じます」[柳 1942: 47]と、無名の人々が手仕事の創造性を謳歌して生み出す芭蕉布を称賛している。敏子もまた、母や祖母、祖先という名を出す必要のない大勢の中の1人がつくったものの素晴らしさを知っており、その大切な郷土の技術と文化を守っていきたいという想いから、2022年

に101歳でこの世を去るまで芭蕉布をつくり続けたのだろう。

「私たちを見守るだけでなく一緒にやろうという人が増えてくれたなら、芭蕉布は未長く後世に受け継がれていくことでしょう。私たちはそう信じ、また願っています」[喜如嘉の芭蕉布保存会 n.d.: 22]。平良敏子によって再興された喜如嘉の芭蕉布は現在、大宜味村立芭蕉布会館を中心に後継者らによって制作されており、若手人材育成にも力を入れるべく芭蕉布織物工房も活動している。

「喜如嘉の芭蕉布物語」展はこの後、愛媛民藝館へ巡回する。敏子の想いと作品に触れる人がまた増えることを筆者も願っている。

<注>

- 1) 明治36(1903年)青森生まれ。昭和50(1975)年没。1936年、国画会会場で柳宗悦と出会ったのを機に、民藝運動の同人として多くの傑作を制作した。棟方は柳を生涯の師と仰ぎ、作品が完成すれば意見を求めた。今年が生誕120年にあたり、国際的にも評価の高い版画家、棟方志功の展覧会が東京国立近代美術館で開催された(2023年10月6日~12月3日)。
- 2) Bernard Howell Leach(1887~1979)。イギリスの陶芸家、画家、デザイナー。ロンドン美術学校でエッチングを学び、留学中の高村光太郎と知り合い日本に興味をもつ。明治42(1909)年から東京上野に住み、白樺派、民藝運動の同人との交流を深めた [ギャラリー・セント・アイヴス]。
- 3) 明治28(1895)年静岡生まれ。1984年没。東京高等工業学校(現東京工業大学)工業図案科卒業後、柳宗悦と出会い、沖縄の染物・紅型に出会い、型染めを中心とした染色の道に進む。
- 4) 手織り機の種類。
- 5) 戦時下の日本内地、旧植民地(朝鮮・台湾)で、女性を労働力として動員するために組織された「女子勤勞挺身隊」を指す。1944

年8月の「女子挺身勤労令」で国家総動員法に基づく制度となったが、それまでも学校や地域で組織されていた（朝日新聞デジタル 2014年8月5日 <https://www.asahi.com/articles/ASG7M01HKG7LUTIL067.html>）。

6) 岡山県倉敷市、1909年～1968年。大原美術館の創立者、大原孫三郎の長男。1941年に倉敷紡績社長に就任。1946年、平良敏子ら女子挺身隊に織物を学ぶよう勧め、柳宗悦を通して外村吉之介を倉敷に招いた〔大阪日本民芸館 2023〕。

7) 1898年滋賀県生まれ。関西学院神学部卒業後、京都のYMCA 宗教部主事を務める。1927年から民藝運動に参加。1932年、牧師として静岡の教会に転任した頃から織物をはじめめる。1939年に柳ら民藝運動同人と沖縄で調査・蒐集を行う。1948年倉敷民藝館の開館にあたり、初代館長となる。染色技術、民藝思想伝承のため、1953年に倉敷民藝館付属工芸研究所（現倉敷本染手織研究所）を開校し、作り手の育成に携わる。1965年に設立された熊本国際民藝館の初代館長。愛媛民藝館、出雲民藝館の設立にも尽力した〔大阪日本民芸館 2023〕

8) 戦後1949年に『沖縄タイムス』創刊1周年を記念して開催された「沖縄美術展覧会」が母体。第4回から「沖展」と改称し、郷土再建には文化振興が県民の支えになるとの考えに立ち、現在まで開催を継続している。現在では絵画、版画、彫刻、グラフィックデザイン、書芸、写真、陶芸、漆芸、染色、織物、ガラス、木工芸という12部門を擁する（沖展サイトより）。

<参考文献>

新井菜津 2022「喜如嘉の芭蕉布 布は語る 平良敏子 平良美恵子」『Coyote』76: 32-49。

大阪日本民芸館 2023「秋季特別展 喜如嘉の芭蕉布物語リーフレット」大阪日本民芸館。

喜如嘉の芭蕉布保存会編 n.d.『喜如嘉の芭蕉布 国指定重要無形文化財（総合指定） 経済産業大臣指定 伝統的工芸品』喜如嘉の芭蕉布保存会、大宜味村立芭蕉布会館。

栗田邦江 2023「芭蕉布復興——大原総一郎・外村吉之介・平良敏子」『民藝』848: 20-23。

天空企画編 2002『図説 琉球の伝統工芸』河出書房新社。

民藝編集委員会 2023『民藝 8月号』848号、日本民藝協会。

柳宗悦 1942『芭蕉布物語』私版本。

インターネット資料

朝日新聞デジタル「『挺身隊』との混同 当時は研究が乏しく同一視」（2014年8月5日）

<https://www.asahi.com/articles/ASG7M01HKG7LUTIL067.html> 2023年11月30日閲覧。

沖縄県大宜味村「喜如嘉の伝統工芸 芭蕉布の歴史」
https://www.vill.ogimi.okinawa.jp/soshiki/kanri/gyomu/gaiyo/profile/bashofu_village/704.html 2023年11月30日閲覧。

沖展

<https://okiten.okinawatimes.co.jp/cms/> 2023年11月27日閲覧。

喜如嘉の芭蕉布（喜如嘉の芭蕉布保存会）

<http://bashofu.jp> 2023年11月27日閲覧。

ギャラリー・セント・アイヴス「バーナード・リーチ」

<https://www.gallery-st-ives.co.jp/bernard-leach> 2023年11月27日閲覧。

中川政七商店「日本全国工芸百科事典 芭蕉布」

https://story.nakagawa-masashichi.jp/craft_post/118002 2023年11月27日閲覧。